

# これからの猪猟

〈6回〉

田宮 治

## マロ号の極致のラウンド芸

マロ号は堰堤を渡り、反対側の大杉林を通っている横道（猪道ほどの小道）に乗って大谷下に向かって必死に猪を追っているが、その大谷も五〇〇メートルくらいで終わっており、その先には民家がある。

こうなれば猪は「袋の鼠（猪）」である。一流芸のマロ号相手に民家や街なかに逃げ込むわけにはいかない。もし、この猪が逃げるとすれば、山裾を左に大きく回り込み、突き当たりにある二〇〇メートルの峰を越えて保護区に逃げられないようにするだろう。そうならないようにするために、沢（谷底）の上に進む道を選びながら大杉林を突っ走っていると、またマロ号が鳴き始めた。

GPSで止め現場を確認する

と、大谷の最終点で民家ぎりぎりの所だ。ここは、一歩間違えると犬たちに急迫された猪が民家に飛び込んでしまいかねない危険な場所である。

しかし、私が安心して「袋の鼠」と決め込み、危険と隣り合わせの止め現場であろうとも、自信を持って攻め立てられるのは、必ず猪の行く手を遮り危険を回避する絶妙な一流芸をマロ号が持っているからだ。つまり、素晴らしい鳴き声で威嚇しながら、大きくラウンドして、猪を民家の反対側へと追い立てる止め芸に仕上がっているのである。

そうでなければ、民家の近くや千葉のような三〇〇メートル程度の低い山の猟場では安心して猪猟などできない。低い山で猪を立てて（起こして）、犬たちが鳴き出せば、すぐ下の民家では飼い犬たちがワ

ンワンと鳴き騒ぐ。それに反応して猪犬たちが飼い犬や家畜を襲ってしまおうと、一巻の終わりである。そんなことにならないためにも、愛犬たちの猪芸を極致まで高めておく必要があるのだ。

「これなら文句はないだろう」と、囁（ささや）けるような猪猟の名犬や超一流の猪犬群を完成させるには、こうした重要な点を踏まえ、日頃の訓練と実戦を繰り返し実行しなければならぬのだ。

私はこれまでの経験から、民家近くでの「勝利の方程式」は十分心得えているつもりだ。今回もマロ号を信じて大杉林から五〇メートルの所に立ち、いつでも撃ち込める態勢で猪止め現場を見下ろしていた。無線の音量を最小にして、GPSもポケットにしまい、マロ号の鳴き声だけを頼りに待ち構えていた。

マロ号は大きくラウンドして戦い続けているが、鳴き声の微妙な変化やその動作によって位置が分かる。マロ号は私がいる位置を既に感知しているようで、民家への逃げ道を見事に遮って山側にいる私の方向に追い上げようとしている。マロ号まで八〇メートルあるが、明らかに私のほうに向かって堂々と吠え込んでいる。

杉の木の下に立ってライフルを杉の木に添えて狙い撃ちしようとして、止め現場をスコープで凝視するが、肝心の猪は全く見えない。猪さえ見えれば八〇メートルなので、撃ち下ろしができる絶好のチャンスである。そこは杉林の下に広がる段々畑の跡地に何本も栗の木が植えられ、荒れ放題だが明るい茅と草の藪になっている。

ところが、こんな藪の明るい場所でも、猪は保護色である上にマ

口号の射竦めに嵌まっても、全く動かないので発見するのが極めて難しい。

何とかこの場所で締めくりたいと思ひ、左下に移動した時、マロ号の鳴き声がゆっくりゆっくりと動き始める。姿は見えないが、山裾を上に向かって私の待つ杉林下の小沢を通り、その奥に横たわる大尾根越えを目指しているようだ。

マロ号は「ジジ、猪が行くぞ」と怒鳴っているような凄じ威嚇鳴きで押し上げて来るが、猪の姿は

やはり見えない。

せつかくマロ号が猪を押し戻してくれたいこのチャンスを利用してなるとかと思ひ、山裾の上の五〇〇メートルを一目散に突っ走った。大杉の根元に陣取り、そこで足場を固めて猪が下の小沢を登って来た時に必ず撃つ獲る態勢で待ち構えていた。

ところが、登って来るはずの猪がなかなか現れない。「変だな」と思っていると、マロ号が鳴き出した。その鳴き声は全く想定外の辺りからで、それも聞き取れない

ほど小さな声だ。

「何だ？ これは……。いつの間にかこんなに離れたんだろう」とGPSでマロ号の位置を確認すると、栗林の広場から五〇〇メートル上がった小沢にいるみたいだ。

「どうしてこうなるんだ？」。周りの山容を調べると、栗林の広場から二〇〇メートルの幅で大杉林が大尾根の六合目辺りまであり、その杉林の前平を挟むように、左側には私の待つ小沢があり、右側にはマロ号が猪を止めている小沢がある。

しかし、大尾根の頂上付近は険しい断崖絶壁なので、両方の小沢は途中でなくなっている。大尾根といっても二〇〇メートルの山なので、ぐずぐずしていたら、瞬間に猪は尾根を越えて保護区まで逃げ込んでしまう。

### ジジ、猪はここだよ

マロ号は私の気持ちが分かっているのか、猪を私の前に押し出そうと躍起になっている。私はこの機を逃してなるものかと思ひ、最

後の力を振り絞って険しい谷を渡り、マロ号が待っている小沢に立った。

GPSで詳しく見てみると、猪止め現場は小沢の左上三〇〇メートルの所にあるが、その目の前には大きな堰堤があり、その上は絶壁になっている。右側は大杉林で急斜面になっており、やはり、その上は崖で登れそうにない。本来、右側の杉林を登って上方から猪を攻めたいが、小沢も杉林も上まで登ることができない。

マロ号はGPSで見る限りすぐ左上の雑木(シバ藪)の藪中にいるようだが、山全体が急斜面なので、マロ号の鳴き声からすると八〇メートル離れている。何とか寄り付かなければと思ひ、大急ぎで二つの小沢の中間にある大杉林まで戻り、杉林の前平を二分するように上っている小峰伝いに必死で攀じ登った。

やっと左下三〇〇メートルの所までたどり着いた。せめてもう少し登って横から猪に寄り付きたいのだが、山が険しくて無理なので覚悟を決め、八時方向からシバ藪を



山梨の猟場はどの山も険しい所が多い

右斜め上に突き進み、先ほどの堰堤がすぐ下に見下ろせる崖の上に立った。

当然、バリバリ、ガサガサと強行したので、猪は飛び上がって越えてしまふかと思つたが、崖の絶壁が幸いしたようで、マロ号の鳴

き声は変わることもなく大尾根の上のほうから攻め下ろしている。

驚くほどの大きな鳴き声で威嚇し、今度はこの峰を越えさせてはなるものかと、山の七合目辺りを

右に左にせわしく動き回り、鳴き続けています。マロ号のすぐ下に猪

が潜んでいるようだが、この平面が雑木の藪なので、見上げても三〇呷くらいまでは何とか見える

が、その先は全く見えない。ちょうどその時である。マロ号が左上三〇呷くらいの所に姿を現

した。マロ号は鳴きもせず、静かに立ち止って私を確認すると、「ジジ、猪はここだよ」というよ

うに、そこから横に走り、私の左上から真上に向かって二、三回小声で吠え立てた。

岩に溶け込んだ大物が……。まるで置き物のようにひざまずき、ピクリとも動かないでいる。やつと

姿を見せた猪にすかさず一撃をくらわせた。凄いい音が山々に響き渡つた。

その場で決まると思つた瞬間、猪はマロ号目掛けて突進して来た。当然、マロ号も銃声に元気づ

いても、凄いい勢いで噛み出した。流石の荒猪もマロ号の大声と狂騒

に突くのをやめ、少し上を走り去ろうとするが、そこをすかさず二

の矢を送り込んだ。ところが、猪は何事もなかつたようにシバ藪に姿を消してしまつた。

「しまつた。行つてしまつたか……」と愕然とし、マロ号を見ると既に逃げる猪に追いつき、あつという間にシバ藪に姿を消して行つた。

### 見事な連携プレーが勝利を呼ぶ

「当たらないわけがないのになあ……。さて、どうしたものか」

と、銃を突き出したままその場に

立ち尽くしていた。

すぐマロ号がまた凄いい威嚇鳴きを二、三回張り上げていた。そこ

は先ほどマロ号が顔を出した所から三〇呷くらい上の雑木の中である。

追い落としして来るだろうと直感し、マロ号が姿を現した辺りを凝視していると、今度は猪が姿を現

した。そして、猪は私が小峰を登つてこの場所に来た猪道に乗つて

こちらに向かつて来るではないか。ところが、前足が折れているのかヨタヨタして動きが遅い。そ

れでも突いて来るだろうと銃を構えて撃ち込もうとした時、突然、マロ号が上のシバ藪から飛び出し

て猪の前に立ちはだかり、凄いい唸り声で攻め立てた。

半矢の猪だったが、まだまだ元気なので、このままではマロ号が危ない。猪止め犬が大ケガをする

のはこんな時である。猪まで三、四〇呷という一刻を争う撃ち込みのチャンスだったが、その直線上にマロ号があるので撃つことができない。猪道から二歩下に移動して、銃を持つ左手を櫓の木の幹に

添え、猪に狙いを定めた。

スコープを五倍にしているので、三五呷くらいの距離だと、まるで猪は化け物に見える。そばに

いるマロ号の姿はスコープ内に入つてこない。マロ号には絶対当たらないように、スコープから目を離してマロ号の動きが止まつた瞬間、引き金を下ろした。

ブローニング06の轟音が山々に響き渡つた。そして、流石の化け物もその場にひざまずくように崩れ落ちた。

「やつたぞ、マロ！」と思わず大声を張り上げた。マロ号はそれを合図のように猪の頭に噛み付き、今までの戦いの思いを爆発させている。「よしよし、マロ。思

い切り噛め！ 肉などどうなつてもいいから」と、ともに苦戦を戦い抜いて完勝したことをかみしめた。

「ああ、よかつた」と、猪道にどっかり腰を下ろし、獵友の松土さんに連絡をする。

松土さんはこんな時間まで戦つていた私のことを心配していたよ

うで、「どうしたのか？」と聞く



厳しい猟場でマロ号と一緒に7時間も猪を追いまくり、遂にブローニング06（5連にツアイス21倍付き）で撃ち止めたグレの大物。マロ号もご機嫌で、ハイ、ポーズ

ので、「いい猪をいま撃ち獲ったよ」と返事する。「それは凄い。今まで追っていたのかよ」と驚いている様子だ。

「全く場所が分からないので、小宮山さんにそのことを告げて、GPSで調べてもらえますか。そして、夕暮れが近いので三、四人の助けをお願いしたい」と松土さんに伝えると、快く「了解」と言

って電話を切った。

た。快晴でも、この季節だと山中に残っているギリギリの時間帯である。すぐに小宮山さんから連絡が入った。

小宮山さんとは何度も猪猟をやっている仲間である。無駄口を言わず、「そこで猪を撃つたのですか？」と聞いてきたので、「そうですね、周りの状況が初めてなので……」と続けて説明しようとする

と、「はいはい、分かりました。三十分くらいで到着しますから、よろしく」との返事である。

私は夢中になって、全く知らない土地にまで狩り込んでしまったが、こんな時のために朝お願いし

てあった猟友たちの気持ちが嬉しくて、心から感謝していた。小宮山さんは大物猟には欠かせないGPSの専門家である。自ら研究して会社を設立し、日本語に訳したものを全国に販売して

おり、大物猟の発展に頑張っている成長株の若者である。

そんな猪猟への取り組む姿勢から、射撃の腕前もなかなかもので、リーダーの松土さんをもって「彼のタツに嵌まればしめたものだ」と言わしめるほど信頼されている。そんな小宮山さんが駆けてくれるというので安堵して、気になっていたマロ号の所にゆっくりと近寄って行った。

「マロ、よしよし、よかつたなあ」と呼びかけると、マロ号は猪に噛み付くのをやめて飛び付いてきた。「よし来い、マロ！ よくやったなあ、ありがとう」と思い切り抱きしめてやった。

そして大好きなジャム入りコッパンを半分に切ってやったが、

今日は食べないようだ。

「マロ、そんなに疲れたのか」と、ボトルの水をやる。とゴクゴクとうまそうに飲んでいった。

マロ号は勝ち取った激戦の成果に酔い痴れているようで、全く疲れを感じさせないくらい喜々としていた。「ジジ、よかつたね」と言いたげである。

「よしよし、本当によかつた。

よしよし」と全身を撫で回して点検するが、これほど長時間の激戦にもかかわらず、マロ号は全身無傷だった。「よし大丈夫。立派なものだ」とまた抱きしめてやる。

そこで、「マロ、来い」と撃ち獲った猪のそばに呼び寄せ、「そこに座れ！」と命じたのである。そして、私の代わりに愛用のブローニング06を猪の横の木に立て掛けた。

今日の大一番を生涯忘れないように、激戦に打ち勝ったマロ号と私の雄姿をどうしても写真に残しておきたかった。マロ号も私の気持ち

が分かってい